

特集：入学

環境と生物

桑山 秀一（筑波大学 生命環境科学研究科）

ご存知のように2011年（平成23年）3月11日14時46分に発生した東北関東大震災は、未曾有の被害をもたらし、新入生の皆さんの中にも御家族や御親戚、知人の方々が被災された方がおられるかもしれません。加えて、福島第一原子力発電所の放射能漏れも重なり、皆さんと顔を合わせる前は、きっと不安げな表情をしているのだろう予想していました。ところが、皆さんと顔を合わせるとそんな私の不安はなくなりました。オリエンテーションでは皆、学類長やカリキュラム委員長のお話に熱心に耳を傾け、また新入生歓迎会では弾けんばかりの楽しそうな笑顔に初めて心から「入学おめでとう！」という気持ちが湧いてきました。

さて、皆さんは大学生活を始めてみてどうでしょうか？期待や予想していたものと大きく違っていますか？それとも、期待通りのものでしょうか？私自身の入学当時を思い返すと、入試でイヤな社会や国語を無理に勉強していた私にとってようやく「自分の好きな勉強にだけ専念できる！」と思ったことを覚えています。ところが履修申請に至って、1、2年のうちは専門以外の科目履修が予想以上に多く（むしろ専門よりもそちらの方がほとんど！）ずいぶんへこんだことを覚えています。それゆえ、あまり真剣に授業を受けていなかったと記憶しています。じつは、その頃学んだ教養科目（「哲学」なり「人間論」なり）が、私の生物を研究する上での土台になっていると思います。ですので、皆さんにはぜひ自分が知らない分野も積極的に勉強してもらうことを強く希望します。

短いですが最後に私が学生時代に読み、生物を志すきっかけの

ひとつにもなった（実は私は大学では化学を専攻していました。）「生物の世界」（著者：今西錦司、講談社文庫）の中の一部を御紹介したいと思います。「環境とはそこで生物が生活する世界であり、生活の場である。しかしそれは単に生活空間といったような物理的な意味のものではなくて、生物の立場からいえばそれは生物自身が支配している生物自身の延長である。もちろんこういっただけからといって環境は生物が自由につくり自由に変え得るものではないのである。環境をどこまでも生物の自由にならない、その意味において生物自身に対立するものとみるならば、その環境はわれわれの身体の中にまで入り込んできているばかりでなくて、実はわれわれの身体さえ自由につくり自由にかえることができないという点では、これを環境の延長とみなすこともできるであろう。生物の中に環境的性質が存在し、環境の中に生物的性質が存在するという事は、生物と環境とが別々の存在でなくて、もとは一つのものから分化発展した、一つの体系に属していることを意味する。その体系というものは、広い意味ではこのわれわれの世界全体が一つの体系ということにもなるが、一匹一匹の生物がそれぞれの世界の中心をなしているという意味からいえば、その生物とその生物の環境とではやはり一つの体系を作っていると言えるのである。」

新入生諸君には、一生物、人間として、自らの環境（大学生活）を積極的に取り込み今後の人間形成の一部として発展し、さらに将来社会環境を大きく進展される力を学生時代に養ってもらうことを期待しています。

Contributed by Hidekazu Kuwayama, Received May 10, 2011.